



## 故障と高校生

すぎはら整形外科

杉原泰洋

診療が終わって、最後に戸締りをしてから、車の方へと向かう途中、大雪警報が出ていたため、消雪用の水を出していこうか迷った。空を見上げると、雲は薄らとかかっているだけで雪雲はまだなかった。

(まあ、いいか) と思い、車に乗り込み、エンジンをかけた。ギアをDにしてアクセルを踏むが、動かなかった。ギアを確かめると確かにDになっている。やはり動かない。運転席のパネルを見ると、何か書いてあった。「トランスミッションが故障しています。すぐに止めて安全な場所に移動してください」。

(はっ? 移動するも何も最初から動いてないじゃないか) オートからマニュアルに移動したりさまざまやってみたが、車はエンジン音を唸らせるだけで1ミリも動かなかった。妻に迎えに来てもらうことも考えたが、まずは電車の時間を調べてみようと思い、携帯で調べると、あと10分弱で水原駅から新発田に向かう電車が来ることになっていた。

(ダメもとで行ってみるか) と思い、車を出て走り出した。とはいっても、普段まったく走っていないので、駅まで走り通すことができないのはわかっている。走っては早歩き、走っては早歩きを繰り返しながら、ばてないように駅へと向かった。あと何分か時間が気になったが、見ている暇があったら走ったほうがいいに決まっているから、とにかく急いだ。息を切らしながらようやく到着し、時刻を確かめると、あと1分ほど余裕があった。すぐに自販機で切符を買った。330円だった。もう駅員は誰もおらず、改札口はカーテンが閉まっていて、自動改札もないので、そのままホームに出た。

(何とか間に合った) と思ったものの、ホームには誰もいなかった。おかしいと思い、携帯で時刻表を確かめると、6時29分で間違いなし、時刻は6時28分だった。まもなく電車がやってきた。だが、電車は反対の方角からやってきた。その電車は高校生たちを降ろすと、新潟方面へと向かって去っていった。

もう一度時刻表を見てみた。すると、6時29分というのは、朝の6時29分だった。時刻表の画面をスクロールして夕方の時間に移してみると、18時14分発になっていた。とっくに出了後だった。その次は、19時8分まで電車はなかった。ふーっと大きく息を吐き、(またか) と思った。こういう早とちりはいつものことだから、腹は立たなかった。

妻にラインして事情を説明すると、迎えに来てくれるとのことだったが、ここまで来たら意地でも電車で帰るしかないと思い、とりあえず新発田駅に着いたら迎えに来てもらうことにした。待合室は、ドアで仕切られてはいるものの、暖房もなく冷え切っていた。待合室には高校生が二人座っていた。すぐに家に帰らずに、携帯のゲームで盛り上がっていた。マジカーとか、ヤベーとか同じような短い単語を繰り返しながら熱中していたが、20分ほどすると、出て行った。

あと数分で電車が来る頃になって、自動案内の声が聞こえてきた。今度は間違いなかったが、1番線か2番線かで迷った。1番線ならここで待たばいいが、2番線だと陸橋を渡って反対側になる。

(いったいどっちなの?) と思ったが、アナウンスはただ時刻を繰り返すばかりで、何番線かは教えてくれなかった。駅にはわたし一人しかいなかった。1番線でも2番線でもいいように、階段

を上がって陸橋の真ん中で待つことも考えたが、さっきの電車は1番線で反対方向に行ったから、2番線で待つことにした。はたして電車が来てみたら、1番線だった。これ以上電車を逃すわけにはいかず、すぐさま階段めがけてダッシュした。

何とか間に合い、椅子に座ってから、ふと中学時代のことが頭に浮かんできた。当時は汽車通学していたのだが、寝坊がたたって後ろから列車に追い越されながら、全力で走って何とか追いついたことが時々あった。ところが、ある日完全に遅れてしまって、もう諦めて走るのを止めてしまったことがある。そのとき、車掌さんは、黙って手を振って待っていてくれた。東京なら1秒もたがわずドアが閉まるのに、その車掌さんは、30秒ほど待っていてくれた。わたしは再び走り出してホームに上がった。乗客の注目を浴びる中、迷惑をかけたことよりも、ただ恥ずかしかった。せめて車掌さんに感謝の言葉を伝えるべきなのを、それもできずに頭をちょこんと下げただけで列車に飛び込んでしまった。

電車が駅に到着すると、妻からラインが来ていて、駅前の駐車場は満車だから、近くの〇〇という居酒屋の前で待っているとのことだった。駅の駐車場を過ぎると、妻が車から出て立っていた。

(なんでだろう)と思って近づくと、すぐ前に男子高校生が数人かたまっていた。「あなた、こっち来て」と手招きするので、小走りで近づくと、

高校生の一人が雪の上で寝転んでいた。「高校生が雪ですべて転んで両足がつって動けないらしいんですよ」たしかにひとり両足を投げ出したまま寝転んでいた。おそらく部活の帰りなのだろう。取り囲んだ仲間はどう対処しているか、わからないらしかった。

(高校生の頃は、自分で治してたけどな)と思いながらも、両足首を反らせてふくらはぎを伸ばした。「痛えー！」と笑いながら叫んでいる様子を、仲間たちは面白がって携帯で動画を撮っていた。10数秒ほどするとその高校生は「もう大丈夫っす、ありがとうございます！」そう言って立ち上がったが、すぐに「また、つったー！」と叫んだ。それで再びふくらはぎを伸ばしてやると、「今度こそ本当に大丈夫っす、ありがとうございます！」と元気に答えて歩き出した。自分が高校生の頃は、こんなに元気よくありがとうなんて言えなかったなと思いながら、その高校生が少しうらやましかった。すると「あと3分で電車出るぞ」と仲間の誰かが言って、全員で急いで駅の方へと走っていった。

車に乗ってから、妻が「もしかしたら、ここであの高校生を助けるために車が故障したんじゃないですか？」と言った。(なるほど、そういう考えもあるのか、そういうことにしておくか。ただ、あの高校生たちが電車に間に合ったらの話だが)。(新発田北蒲原医師会報 令和7年度4月号より)